

雨天中止

毎月 15 日、会員諸賢に DM を発送している。メインは 3 ヶ月先のご案内。即ち 6 月 15 日発送の DM は、9 月に予定する山行のお知らせになる。「9 月 4 日(日)子檀嶺岳」といった具合にだ。

1981 年 5 月、ネパールから帰国してプラプラしていたぼくは、街の山岳会が登山学校として機能しなくなっているのに気付かされ、この年の 11 月、無名山塾を誕生させた。岩登り・沢登り・雪山登山の基本を学んで貰おうという場を創ったのである。83 年 11 月、中高年と女性を対象にした（日本百名山をめざすような）登山入門講座を開講したいということで、サンシャインシティ文化センターからお声がかかった。机上講座はサンシャインシティ文化センターで開講、実技は無名山塾で引き受けた。実技講座には「中高年と女性のための山の遠足」とネーミングした。

昭和山岳会で登山の基本を学んだぼくの教科書に、「雨天中止」という言葉はなかった。どんな悪天でも一歩踏み出せ、踏み出して行動できるなら行動しろ、行動出来ないような悪天だったら、そこで初めて行動中止を決断すればいいと、教えられた。「山の遠足」でも、その考え方を踏襲した。

「原則、雨天決行です」とメンバーには伝えた。東京で雨が降っていても、現地は晴れているかもしれません。どんな悪天でも集合場所までは行きましょう。集合場所で行動出来ないような悪天だったら、そのとき中止を決める。現地が土砂降りでも山行を中止にしたら、近場の温泉に行ってもいいし、東京に U ターンして映画を見に行ってもいい。朝、我が家の玄関をでるとき、どんな悪天であれ現地まで行くことになんの疑問も感じることはなかった。65 歳を過ぎた頃だったろうか。朝、目を覚まして外を窺うと土砂降りの雨、この天気で行く…? ぼくの心に初めて疑問が生じた。雨の中だって、山を歩いていれば幸せだったのに、雨の中、歩くのが嫌になってきたのだ。我がことながら不可思議な考え方の変化である。

トシのせいにするすると諸先輩からお叱りをうけるが、間違いなくトシのせいだと思う。体力がなくなった。バランスが悪くなった。持久力がなくなった。自分もそうだし、ご一緒する皆さんもそうなのだ。若いときならいざ知らず、このトシになっての雨天決行はリスクが大きい。ぼくの作った新しい山の教科書、「65 歳からの山歩き」には「雨天中止」という文言が加えられた。

もちろん、前日の天気予報だけを信じて山行中止にするようなことはしたくない。当日の朝、布団から抜け出したらまず窓の外を見る。運が良ければ予報が外れて、青空が広がっているかも知れない。残念ながら予報通りの雨降りならあっさりあきらめて山行中止を決断、参加の皆さんに中止の電話を入れる。メンバーがお家を出る時間をチェックしておき、その前に電話しなければいけない。当たり前か…。